医療安全を重視した病理部門システム構築の取り組み

◎今川 誠[1)]、蓑島 敦志[1)]、山口 まどか[1)]、池下 隼司[1)]、小泉 潤[1)]、朝日 久仁子[1)]
KKR 札幌医療センター[1)]

【はじめに】病理部門における検体取り違え等によって生じる医療過誤は、患者に及ぼす影響が大きく絶対に起こしてはならない。一方で、病理診断に至るまでの標本作製は数多くの手作業による工程が存在し、ヒューマンエラーが起きる危険性に常時さらされている。今回我々は、ウェブカメラによる画像記録を利用し、医療安全を重視したシステムを構築したので紹介する。

【方法】2019 年 8 月の院内ネットワーク更新の際に、病理・細胞診業務支援システム（EXpath4, INTEC）、ウェブカメラ（Ziggi-HD Plus, IPEVO）、タッチパネルモニター（23inch DuraVision, EIZO）を標本作製における各工程の作業場に配置した。組織検体を標本作製用のカセットに詰める切り出し作業の際に、提出された検体容器ならびに検体番号や個数、性状等を撮影する。前の工程で撮影した検体カセット画像を作業毎にモニターで確認・照合し、番号や個数、性状ならびにカセット内の検体の向き等も確認しながらパラフィンブロックを作製する。更に次の薄切工程でも、検体カセット画像や臓器の切り出し図をモニターで参照してから作業する運用とした。

【まとめ】ウェブカメラを使い、工程の要所となる作業内容を撮影し画像記録として残すことで、その画像を他の工程作業時に随時モニターにて確認利用することが可能となった。また、臨床各科の提出検体の容器に貼り付けされたオーダーラベル、手書きラベル等も画像記録として保存できるようにもなった。これにより、ラベルの貼り間違えや記載ミス、検体取り違え等が起こった際、工程をさかのぼって追跡調査ができるといったトレーサビリティの確保にも繋がった。このようなシステム構築は、手作業による工程が多く存在する病理部門において、ヒューマンエラー防止などのリスク管理に極めて効果的で、医療安全の観点からも有用な取り組みであると考える。

連絡先　011-832-3302